



長谷川 泰隆 教授 略歴

生年月日 1955(昭和30)年3月5日生

#### 学歴

1978(昭和53)年3月 中央大学商学部会計学科 卒業  
 1980(昭和55)年3月 早稲田大学大学院商学研究科前期課程 修了  
 1985(昭和60)年3月 同大学院商学研究科後期課程単位取得 退学

#### 職歴

1985(昭和60)年4月～1988年3月末日  
 旭川大学経済学部 専任講師  
 1988(昭和63)年4月  
 富士短期大学経営学科 専任講師  
 1989(平成元)年4月～1994年3月  
 同短期大学 助教授  
 1994(平成6)年4月  
 麗澤大学国際経済学部国際経営学科 助教授  
 2001(平成13)年4月  
 麗澤大学国際経済学部国際経営学科 教授  
 2008(平成20)年4月～2020(令和2)年3月  
 麗澤大学経済学部経営学科 教授

#### 学外講師・非常勤講師等

1989(平成元)年4月～1991年3月31日 富士通電算機専門学院 学外講師  
 1989(平成元)年4月～1994年3月31日 明治学院大学経済学部 非常勤講師  
 1991(平成3)年4月～1995年3月31日 大蔵省税関研修所(柏) 学外講師



## 長谷川泰隆先生への謝辞

経済学部特任教授

豊嶋 建広

長谷川先生は麗澤大学経済学部の発展のために26年間にわたりご尽力くださいました。特に、研究科創設後は、指導教員として熱弁をふるうにとどまらず、研究科の業務も引き受けていらっしゃいました。まさに麗澤大学にとってなくてはならない存在でした。

実は、私個人にとっても、長谷川先生はなくてはならない大切な人、恩人と言ってもよいかもしれません。私は先生の2年前に就任しておりますが、当時体育の教員は学部には一人であり、また経済学部（当時は国際経済学部）ということで、全く畑が違うこともあり当初はまるで無人島にでもいるような感覚でした。長谷川先生の就任は私にとって一筋の光でした。すぐに意気投合し、帰りは南柏駅まで歩いてご一緒するようになりました。先生が就任されてからの26年間、恐らくその1/3は先生と帰宅の道を共にしたのではないのでしょうか。話の内容は、たわいない雑談から仕事のことまで多岐にわたっていましたが、大学の将来について熱く語り合ったことをよく覚えています。

先生とは全く専門分野が違いますので、業績等に関しましてはこのページの前に掲載される一覧をご覧頂くとして、私からはもう少し「人間・長谷川泰隆」先生についてお話させていただきます。

私が持つ長谷川先生のイメージは、「学生思い」、「律儀」、「誠実」、「独特のこだわり」、「時代の流行に流されない」、「不器用」です。

長谷川先生は、授業や学生のマナーについては厳しい先生でしたが、実は大変学生思いの先生です。「実は」と申し上げたのは、その思いが学生たちに伝わっていないのではという危惧からです。例えば長谷川先生は落語が大好きで、落語の登場人物のようなべらんめえ口調（ユーモアをもって）で話しかける時がありますが、落語を知らない人にとっては少しきつく感じたかもしれません。それでは先生の「実は…」の実話を少しお話ししたいと思います。

先生は長くサッカー部の顧問をしておられました。部員達が先生に練習環境の改善を願いますと、時間を見つけては再三学生支援課に掛け合っておられました。しかし、思うように改善されないことで、学生に対して申し訳なく感じていたようです。また麗澤高校にラグビーグラウンドが完成すると、サッ

カー部も練習に使用できないかと責任者と交渉し、条件付きではありますが、使用を認めてもらいました。また部にコーチがないということで、ご一緒に各方面を探し、日本サッカー協会A級ライセンスをお持ちで、日本スポーツ協会A級指導員という優秀な人材をサッカー部のコーチに迎えることができました。もちろん、試合にも幾度となく応援に足を運んだと聞いております。

その他、私が関係していた空手道サークルの顧問をお願いしたときも快く引き受けてくださり、忙しい中一緒に合宿にも参加してくださいました。陸上競技部の後援会の学部幹事もお引き受けくださり、当時もう一人の幹事で現副学長の堀内先生とともに、箱根駅伝予選会には毎回参加され、予選会が終わると帰りに残念会を催してくださいました。また本学の学生が学生連合チームに選ばれた時は、その応援にも必ず駆けつけ一緒に応援してくださいました。授業のみならず課外活動でも、関わった学生のためには一生懸命尽くす。しかし学生におもねることはしない。この辺りが先生の先生らしいところであり、私が最も尊敬しているところです。

長谷川先生の「律儀で誠実なところ」は随所に見受けられましたが、中でも印象深いのは、国際経済学部創設時に着任された大島末男先生がご退任するにあたって、そのお部屋の片づけをされていたときのお姿です。

大島先生は退任の数年前から体調を悪くされお身体が不自由でした。十数年前のことで私のはっきりした理由は覚えておりませんが、長谷川先生が大島先生の研究室の片付けをお手伝いすることになったのです。私も1、2回は長谷川先生と一緒にお部屋に伺った記憶がございますが、先生は、ともかく大学にいらっしゃった時は、授業と授業の合間を縫って常に大島先生の研究室の片づけをされていました。何日もかかってほぼ先生一人でお片付けになって、最後はごみ一つなかったと思います。私は大島先生とお部屋が近いこともあり、長谷川先生が献身的に行動するお姿を拝見して、本当に律儀な方だと感心したのを覚えております。この件につきましては、大島先生ご自身もご退任のご挨拶の中で、長谷川先生に感謝の意を述べておられました。

長谷川先生を語る上で忘れてならないのは、やはり先生の代名詞ともいえるダジャレでしょうか。先生のダジャレは常にひねりが効いています。単なるおやじギャグは許さないという強い「こだわり」と「プライド」があります。「ウケる、ウケない」より、つまり「笑い」より「ひねり（工夫）」に重きがあるのではと思える程でした。例を挙げれば枚挙にいとまがありませんが、国際経済学部の新入生を連れて廣池学園の谷川の施設を訪れた時の学生に対する先生の自己紹介は「長（おさ）谷川（たにがわ）」でした。私の記憶が正しければ、これは教員にのみ受けていたような気がします（長谷川先生すいません）。

このように、長谷川先生のダジャレは、非常に高尚で（ひねりが効きすぎて）、先生は「ダジャレクイズ」というもいべき新しい分野を開拓していったのかもしれない。ご本人によれば授業でもダジャレを連発しておられたようです。果たして学生諸君は先生の高尚なダジャレを理解することできたのか。

さらに、先生のこだわりはスピーチにも。懇親会等でのスピーチでも常に他の人にはないアイデアが取り入れられており、いつも何が飛び出すかワクワクしながら拝聴しておりました。

長谷川先生のこだわりに関していえばもう一つあります。それは今日まで携帯をお持ちにならなかったことです。なぜお持ちにならないのか？26年間のお付き合いがある私にもよくわかりません。可能性としては：

1. 本当はお持ちになっているのかも？
2. 最初に必要ないと思い、あとはそれを守り通す男の美学か？
3. 単に持たないというこだわりか？
4. 時代に流されないというこだわり？

原稿を書きながら、先生がよく真似をしていた高倉健さんの「不器用ですから」という言葉は先生の本心だったのかとも思えてきました。

26年間にわたる大学・学部・研究科への多大なるご貢献、そして個人的ながら、豊嶋とお付き合いくださいましたことに心より感謝いたしますとともに、先生の益々のご活躍を祈念いたします。本当にありがとうございました。